令和６年度中学校武道授業（少林寺拳法）指導法研究事業

令和6年度中学校武道授業（少林寺拳法）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・少林寺拳法連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁）が6月29日・30日の2日間、日本武道館大会議室において、研究者5名、研究協力者4名、連盟事務局1名が出席して実施された。

本研究事業は中学校武道必修化の充実に向け、学習指導要領に準拠し、年間８～10 時間の授業時間想定で、各武道種目の特性を踏まえた指導計画、指導内容、指導法、評価等について、教育効果の上がる武道授業（少林寺拳法）指導法の研究会を実施するものである。

■1日目（6月 29 日）

開講式では、端春彦日本武道館振興課長の主催者挨拶の後、研究者を代表して中島正樹研究者が挨拶を述べた。

開講式終了後、各研究者が実践発表を行った。

宮崎貴臣研究協力者は授業の回数によって生徒の少林寺拳法に対する心境にどのような変化が生じるのか調査することを目的としたアンケートの結果を発表した。それをもとに少林寺拳法の良さを最適に伝える授業時数について、少ない授業時数でも導入としての楽しさや技、教えは伝わるが、「誰一人取得漏れがない」という視点で技の理解や活用を見ると、一定の授業回数が必要になるであろうと述べた。

続けて、上杉嘉紀研究協力者が所属校で実施した少林寺拳法授業の内容や評価の方法について、実際に生徒が授業で行った団体演武の動画を紹介しながら、発表し、生徒たちに自らの身体で考えさせ、協力して技を習得させるために、生徒の自主性を促す問いかけの方法やポイントについて説いた。

横山駿太研究協力者は、武道経験がなかった自身が令和５年度開催の全国指導者研修会への参加をきっかけに、少林寺拳法を授業に取り入れるまでの経緯を説明したのち、「私にとっての少林寺拳法を見つけよう」をテーマに行った授業内容の発表を行った。

中山俊宏研究協力者は石川県小松市における少林寺拳法の普及展開について実施校の紹介や、少林寺拳法連盟とスポーツ協会との連携及び、派遣体制の構築や地域内の研修システムについて発表した。

中村優一研究者は保健体育科教員に向けた研修会の実施というテーマで発表を行った。武道未経験者や、武道授業に対して不安を持っている教師が少林

寺拳法に興味を持って、授業をやってみたいと思えるような研修会にすることを目的に、実際に実施することになった場合の内容やアプローチの方法について展望を語った。

安田智幸研究者は「指導の一般化に向けて」をテーマに岡山県での取り組みや、笠岡市・総社市にて実施した授業についての写真や生徒からのアンケートの結果を用いながら紹介を行った。

桑島亜紀研究者はインクルーシブの観点を用いた少林寺拳法の授業をテーマに発表を行った。子どもたちの支援のために指導者として、様々な角度や方法から理解をしようとすることが重要であり、指導者の行動が子供たちの育つ環境に影響を与えると述べた。

小井寿史研究者は「非認知能力を高めるための少林寺拳法授業について」をテーマに発表を行った。生徒が気づき、意識し、成長できるように、教師は授業内の各場面で仕掛けを行う必要があること。教員の資質や能力の向上のためには、生徒と価値を共有することが重要であるということを述べた。

中島研究者は「感覚統合の考えを用いた指導」をテーマに発表を行った。感覚統合とは人間の持っている感覚器官を通じて入ってくる複数の情報を上手く整理・分類し、まとめる機能を指し、感覚統合ピラミッドの図を用いて、具体的な指導の方法や流れについて説明を行った。

■2日目（6月 30 日）

2 日目は初日に発表した研究内容をもとに 9 月に開催する全国指導者研修会の日程や内容の整理、募集方法・対象の調整を行った。

閉講式では中島研究者が講評を行い、全日程を終了した。